

「丸山夏鈴」はアイドルとして、 学生として、精いっぱい生きて、

今年5月22日、丸山夏鈴さんというひとりのアイドルが21歳という若さでこの世を去った。彼女は脳腫瘍を患いながらアイドル活動をしていた。それと同時に、故郷である福島を離れ江戸川大学生として学業にも励み、充実した学生生活もおこなっていた。

撮影・文・小林千紗 撮影・溝辺奈菜

学生生活とアイドルの両立

脳腫瘍が初めて発見された。大学進学と同時にアイドルとしては彼女が小学校2年生、7歳の時であった。それから21歳に至るまで7回、とほなく、また病を言い訳もの手術を繰り返してき



A棟1階にかかっているアイドル・夏鈴さんのCDのポスター。



西条先生とゼミの仲間。手にしているのがチンアナゴのペン。奥左から秋元由樹さん、後藤瑞希さん、西条昇先生、小野きよりさん、手前左から青木里香さん、白石さつきさん。



学生・夏鈴さんについて語る学務課の淵一憲さん。

「初めて見せた涙。強いと同時に弱くもあつた夏鈴」

切しゃべらなかつた。時には友人と大好きなポケモンのカフェへ出かけ、また時には茨城県の水族館へ行きお揃いのチンアナゴのボールペンを購入して愛用していた。そして亡くなる直前までデイズニードへ遊びに行く約束もしていた。彼女はいつも明るく元気な姿を見せていた。しかし、友人たちの前で一度だけ涙を流したことがある。それは7度目の手術が決まったときのことだった。小野きよりさんが夏鈴さんを励まそうと、皆に声をかけ、楽しかった思い出が詰まった手作りのアルバムを贈ったのだ。そのアルバムを見て涙をこぼすと同時に自身の病気について不安げに語った。そのときだけ、強い女の子がふつうの女の子に戻った。私たちと何の変りもないひとりの女子学生でもあったのだ。

このがんばり屋な面は、高校時代からも感じられる。彼女は高校サッカーの強豪校として有名な福島県の尚志高等学校の出身。1000人を超す生徒をまとめる生徒会長も務め、最後まで仕事を全うし、卒業式に答辞を述べた。

その彼女の精神面の強さは、江戸川大学生として「登校の際に酸素吸引機を恥ずかしがることなく堂々と引いている姿が印象的だった」と職員が皆口々に語る。彼女のゼミの指導教員・西条昇准教授も「サラッと病気に

「手術で入院します」とこやかに手渡された欠席届には脳腫瘍とあった。あまりの明るさに受け取る側が動転したと、清水一彦教授は話す。また学務課の淵一憲さんは、「実はアイドル活動をしている事をあまり知らな

いたのがすごい」と彼女の強さを感じていた。「手術で入院します」とこやかに手渡された欠席届には脳腫瘍とあった。あまりの明るさに受け取る側が動転したと、清水一彦教授は話す。また学務課の淵一憲さんは、「実はアイドル活動をしている事をあまり知らな

い容態や治療に関しては一

初めて見せた涙。強いと同時に弱くもあつた夏鈴

このがんばり屋な面は、高校時代からも感じられる。彼女は高校サッカーの強豪校として有名な福島県の尚志高等学校の出身。1000人を超す生徒をまとめる生徒会長も務め、最後まで仕事を全うし、卒業式に答辞を述べた。



母校、尚志高校。地元、郡山にある。



母の車にはられたサインのステッカー。



高校までの通学路。母の車で通った。

切しゃべらなかつた。時には友人と大好きなポケモンのカフェへ出かけ、また時には茨城県の水族館へ行きお揃いのチンアナゴのボールペンを購入して愛用していた。そして亡くなる直前までデイズニードへ遊びに行く約束もしていた。彼女はいつも明るく元気な姿を見せていた。しかし、友人たちの前で一度だけ涙を流したことがある。それは7度目の手術が決まったときのことだった。小野きよりさんが夏鈴さんを励まそうと、皆に声をかけ、楽しかった思い出が詰まった手作りのアルバムを贈ったのだ。そのアルバムを見て涙をこぼすと同時に自身の病気について不安げに語った。そのときだけ、強い女の子がふつうの女の子に戻った。私たちと何の変りもないひとりの女子学生でもあったのだ。